令和8年度 11月 水稲管理情報 第5号

収穫後の水田管理で次作の対策に備える！
ノビエ種子低減技術の紹介

今年の稲作でノビエの被害が大きかった方もいらっしゃるのではないでしょうか？ノビエの発生が多いと、種子が田に残り、翌年の発生源になります。収穫後の今だからこそできる対策を行って、次作の被害軽減を図りましょう！

①秋起しの工夫

秋起しの際に浅耕すると表層全域にヒエの種子が散ってしまいます。秋起しを省略する、または天地返しや深耕でヒエ種子を地中深くに埋設することが効果的です。



②除草剤の活用

非選択除草剤であるジクワット・パラコート液剤（プリグロックスL）には、「イネ科雑草種子発芽後枯殺効果」があります。稲刈り後の残草を防除することで翌年に発芽するヒエ種子を減らすことができます。



③石灰窒素の活用

石灰窒素は、農薬成分（シアナミド）が種子に接触すると、呼吸障害を起こし、休眠覚醒し発芽を誘発します。今の時期に散布すると、ノビエが出芽し低温にあたって自然に枯れます。



※ジクワット・パラコート液剤（プリグロックスL）、石灰窒素を活用する場合はラベル表記を確認し、使用法や使用量を順守しましょう。



草刈りは、路肩が分かりやすくなるように行いましょう！
農作業事故のリスクを減らすことにつながります！

※10月号の紙面でスクミリンゴガイ対策としての石灰窒素の施用法を紹介しましたが、「すきこみによる散布」は稲わら腐熟を主目的とした方法で、スクミリンゴガイへの効果はすきこみ時のロータリー耕によるものです。実施される際はその点にご留意ください。

JAおおいた豊肥営農経済センター　営農部　農産課　☎ 63-4994
大分県豊肥振興局生産流通部　地域営農・水田活用第一班　☎ 63-1301

HPからカラーで見られます！